

特集 生協産直は酪農の危機を救えるのか？

04

角田丸森産牛乳にみる生協産直の意義

則藤 孝志 (福島大学食農学類)



(有) 渡辺ファームの渡辺博さん

1. はじめに

「角田丸森産牛乳」をご存知だろうか。みやぎ生協が1994年から取り組んでいる産直牛乳である。宮城県南部に位置する角田市および丸森町の3戸の酪農家で作る生産組合がみやぎ生協のメンバー（組合員）のために毎日生乳を供給している。規模は大きくないが30年にわたって交流を重ねながら産直の事業は続いてきた。

しかし角田丸森地域の酪農は近年苦難の連続である。2011年の東日本大震災と原子力災害、2019年の台風19号（令和元年東日本台風）の大被害は、同地域に甚大な被害をもたらした。そして水害の復旧が完了しないうちにコロナ禍に突入り、現在の飼料等の高騰による危機的状況に至っている。このように絶えず苦難に直面してきた角田丸森産牛乳の生産者にとって、生協産直はどのような存在なのだろうか。また現在の危機を乗り越えるために、生産者は生協産直に何を求めているのだろうか。

これらの問いを考えるために、角田丸森産牛乳の生産者である（有）渡辺ファーム（宮城県角田市）の渡辺博さんにインタビューをさせていただいた。1994年の産直開始から30年にわたって角田丸森産牛乳の生産に携わってきた渡辺さんには、産直への想いや酪農経営をめぐる状況について語っていただいた。渡辺さんへのインタビューはみやぎ生協産直推進本部の協力を得て2023年5月に実施し、事務局長の佐々木ゆかりさんにはみやぎ生協の産直事業についても説明していただいた。

2. みやぎ生協産直と角田丸森産牛乳

みやぎ生協では、1970年に角田市農協（現JAみやぎ仙南）と豚肉や鶏卵の産直を始めて以来、

産直を事業と運動の柱の一つとして位置づけ、メンバー（組合員）・生産者とともに産直活動を育ててきた。宮城県民の7割ほどがみやぎ生協のメンバーであることから、地域の農・畜・水産業の振興、地域経済の活性化と文化の発展、自然環境の保全に寄与するために、とくに県内産地・生産者との提携に力を入れてきた。2011年からは産直商品を「顔とくらしがみえる産直めぐみ野」というブランドで展開している。「めぐみ野」の牛乳は2種類ある。1989年に宮城県北部の鳴子町（現在の大崎市）で始まった「鳴子上原酪農牛乳」と、その5年後に始まった「角田丸森産牛乳」である。ともにロングセラー商品となっている。

角田丸森産牛乳は現在、角田市と丸森町にある3戸の酪農家で生産されている。かねてより牧草や飼料稲などの自給飼料の生産にも力を入れるとともに、牛の糞尿を堆肥化して田畑に還元する循環型農業にも取り組んできた。搾った生乳の全量を産直牛乳用として酪農協を介して出荷し、生乳は東北森永乳業の仙台工場にある専用のタンクで処理され、角田丸森産牛乳として県内

の生協店舗や宅配に供給される。現在の生産量は概ね年間60万本（1リットルの商品）である。生産者には生乳の出荷に対して一般的な乳価に加え、1kgあたり数円の加算金（うち1円は交流活動費）を支払って支援している。そのため店頭や宅配での販売価格は通常のコープ牛乳に比べ数十円高くなっているが、産直の価値を理解して継続的に購入するメンバーは少なくない。

3. インタビュー：角田丸森産牛乳生産者・渡辺博さんに聞く

ここからは（有）渡辺ファームの渡辺博さんへのインタビューの内容をお届けする。1972年（昭和47）に酪農家の2代目として就農した渡辺さんは、当初より「牛を自由にして健康に育てる」酪農を志し、フリーストールと呼ばれる放し飼い式の飼育方法にこだわってきた。牛舎の隣には渡辺さんが「運動場」と呼ぶ120a（1.2万平米）の放牧場があり、牛たちは牛舎と運動場を自由に行き来することができるようになっている。1994年には地域（角田市、丸森町）の酪農家とともにみやぎ生協との産直「角田丸森産牛乳」の取り組みを開始し、生協メンバーとの交流を重ねながら30年にわたって活動をけん引してきた。現在、酪農の経営は長男に継承し、2021年からは宮城県酪農農業協同組合の組合長を務めている。インタビューではまず酪農経営をめぐる状況からお話いただいた。

酪農経営をめぐる状況

【則藤】 渡辺さんは2021年から宮城県酪



角田丸森産牛乳のパッケージ

農農業協同組合の組合長を務めておられますが、まずは宮城県の酪農経営をめぐる状況をお聞かせください。

【渡辺氏】 他地域と同様に宮城県でも非常に厳しい状況です。コロナ禍で牛乳の需要が低迷するなかで、飼料をはじめあらゆる生産資材やエネルギーが高騰しています。とくに飼料の高騰は深刻です。以前から生産費に占める飼料の割合は半分を超えていましたが、最近では乳価から飼料代を差し引くと幾らも残らないような状況で、完全な原価割れです。

トウモロコシ等の配合飼料では、価格安定制度と呼ばれる価格上昇分の一部を補填する仕組みがあるのですが、これは一時的な価格高騰であれば効果を発揮するのですが、現在のように飼料価格が高止まりする状況では2年目、3年目の補填が制度上少なくなってしまう。これが本当に厳しいと感じている酪農家は多いと思います。この点に対しては国や自治体で追加の補填が行われていますが十分とは言えません。さらに、輸入粗飼料についてはそもそも配合飼料のような価格安定制度がなく、価格の高騰は生産費を直撃しています。このような状況をうけて私どもの組合では、2022年度に配合飼料および粗飼料の費用に対する独自の緊急支援対策を2度にわたって実施したところです。

【則藤】 渡辺ファームのように自給飼料の生産に力を入れているところでも状況は厳しいのでしょうか。

【渡辺氏】 うちの飼料自給率は6割程度で、アルファルファ（ルーサン）など購入せざるを得ない粗飼料もありますし、配合飼料も購入しますので飼料高騰の影響は小

さくありません。また飼料だけでなく、家畜用の薬剤や牛舎の建材、機械を動かすための燃料などあらゆるものの値段が上がっています。このような状況を受けて、昨年（2022年）11月に飲用向け乳価が10円引き上げられ、今年（2023年）8月にも10円引き上げられる予定ですが、それを待たずに廃業する経営が県内でも増えてくるのではないかと心配しています。

角田丸森産牛乳のはじまり

【則藤】 ここからは渡辺さんらが30年前に始めた「角田丸森産牛乳」の取り組みについて伺っていきます。まずは生協産直に取り組むようになった経緯をお聞かせください。

【渡辺氏】 宮城県南に位置する角田市や丸森町は以前からみやぎ生協との産直が盛んな地域でした。豚肉や鶏卵の産直は1970年頃からあったようですし、米の産直も近くで行われていましたので、交流の様子などを見聞きすることもありました。そんななかで私が実践していたフリーストールの飼育方法で牛を自由にさせるスタイルの酪農が生協担当者の目に留まったようで、1992年頃に一緒に産直をやりませんかと声をかけていただきました。でも実は、当初は産直に前向きになれず、何度かお断りしたこともあります。産直となると地域の酪農家との協力が不可欠で、飼料や飼育方法に関する調整や交流活動のルールなど、仲間同士で足並みをそろえることの難しさを感じていたからです。

【則藤】 しかしそれでもやってみようとなったのはなぜでしょうか。

【渡辺氏】 もちろん生協担当者の熱心なサポートがあったということもありますが、やはり一番は消費者と交流してみたいという気持ちだったと思います。当初は観光牧場でもない一般の酪農に消費者を招き入れることの不安も多少はありました。それでも、自分たちの牛乳を飲んでくれる人と交流しながら良質な牛乳をつくっていったら素晴らしいと思うようになったんです。またみやぎ生協では1989年から「鳴子上原酪農牛乳」の取り組みを始めていたのでそれも参考にさせていただきました。そうして当時10戸の酪農家で「角田丸森生産組合」を組織し1994年の生産開始に至ることができました。

【則藤】 これまでどのような交流活動を行ってきましたか。

【渡辺氏】 まずは牧場に来てもらうことです。角田周辺の産直生産者をマイクロバスなどで巡るツアーの中に渡辺ファームも入れてもらいました。角田周辺には米や梨、いちごなど多彩な産直品目があり、1日で「フルコース」を回ることができるんです。養豚や鶏卵の産直もあるのですが、家畜感染症の問題で受け入れられるのが酪農だけということで喜んでもらえています。牧場では牛舎や運動場で元気に過ごす牛たちの姿を見てもらったり、安全な範囲で牛に触れてもらったりします。搾乳やバター作りの体験をやったりもしました。生協メンバー（組合員）の参加者や子どもたちがうれしそうに牛と触れ合う姿を見たり、直接「おいしい」と言ってもらったりすることは何よりの励みになります。

もうひとつは、生協店舗での活動です。角田丸森産牛乳が供給されている店舗に赴き、牛乳の試飲や直接販売を行っています。

いまでも年間4、5回ほど各地の店舗に向いて活動しています。牧場での交流活動とは異なり、買い物の場面で消費者・生活者の目線の意見や感想をもらえるので、こちらも貴重な機会になっています。



生協メンバーによる牧場見学

コロナ禍と大災害

【則藤】 交流活動はコロナ禍で一旦ストップしましたね。

【渡辺氏】 コロナ禍1年目の2020年はすべての交流活動がストップしました。ステイホームが叫ばれた時期ですので仕方ありません。しかし翌年からは佐々木ゆかりさんら担当者がオンラインでの交流会を企画してくれるようになりました。こちらは主に息子が対応してくれていますが、遠方からも気軽に参加できるなどオンライン交流のメリットもあるように感じています。でもそろそろコロナ前のように牧場に生協メンバーを招いて対面での交流を再開できることを期待しています。

【則藤】 そのときはぜひ私も参加させてください！さて、角田丸森産牛乳はこれまで東日本大震災や令和元年東日本台風など大災害にも見舞われてきました。

【渡辺氏】 やはり東日本大震災と原発事故の影響は甚大でした。地震と津波の被害によって3ヵ月ほど生乳が通常出荷できませんでしたし、原発事故の影響もあって、震災前は年間約100万本が販売されていた角田丸森産牛乳は、2011年に40万本まで落ち込みました。しかし仲間と協力して除染や吸収抑制対策に必死に取り組み、それらの成果や検査結果を生協メンバーに伝える活動を続けるなかで販売本数は徐々に回復していきました。いま思えば震災の年でも40万本もの牛乳を飲んでもらえたのも、その後60万本まで戻すことができたのも、生協メンバーとの交流を通じた信頼関係があったからだと思っています。

【則藤】 2019年10月の台風19号の被害も大きなものであったかと思っています。

【渡辺氏】 角田丸森地域でも過去にないほどの恐ろしい量の雨が降り、河川の氾濫や堤防の決壊による洪水や土砂災害が各地で発生しました。宮城県では19名の方が亡くなり、被害が甚大であった丸森町では10名の方が亡くなりました。渡辺ファームも阿武隈川沿いにあるため洪水に見舞われ、危機的な状況でした。自宅は高台にあるので無事でしたが、牛舎の寝床には5cmくらい水が上がりました。幸い親牛たちは全員無事だったのですが、子牛が5頭、泥水を飲んでしまったのか数日後に肺炎で死んでしまいました。また粗飼料のロールが1,200個ほど流出し、一部はラッピングがはがれて草が散乱しました。さらに運動場の土も流されてしまい、牛たちを自由に運動させられる場所ではなくなりました。あの光景を見たときは「もう元には戻れないかもしれない」と思ったくらい

です。

この状況を救ってくれたのが、生協職員やメンバーたちだったんです。毎週のように復旧作業の手伝いに来てくれて、散乱したロールのビニールを拾って回ってくれました。家族でやれば1ヵ月のはかかっていたと思います。本当に感謝しかありません。また運動場のほうもしばらく使えない状態でしたが、角田市の支援で客土を入れていただき、無事放牧を再開することができました。この災害を通して、自然の恐ろしさを思い知らされるとともに、一方で産直を通じた生協職員やメンバーとのつながりの力強さを再認識することができました。

【則藤】 本当に恐ろしい災害でしたね。しかしこの災害の復旧作業がまだ終わらないうちにコロナ禍に入っていました。さらに2021年2月と翌年3月にはそれぞれ大きな地震があり、角田丸森地域でも被害が出ましたね。このように災難が続き、ダメージが蓄積するなかで現在の飼料高騰に直面しているわけです。

生産者の乳価について

【則藤】 冒頭で現在の酪農生産は原価割れの状況が続いているとの言葉がありました。が、産直の加算金数円の部分を増やしてほしいと思うことはありませんか。

【渡辺氏】 たしかに生乳1kgあたり数円の加算金は原価割れが続く現状においては大変ありがたいものです。生協メンバーの応援の気持ちがつまった大切な加算金です。しかしそれを増やしてほしいとは思っていません。全国の酪農経営が厳しい状況にあるのは、生産者の乳価がコストの上昇を反

映したものになっていないからです。です
のでまず改善すべきは一般的な生産者の乳
価のほうです。

【則藤】 昨年から今年にかけて2回、それ
ぞれ10円ずつ乳価の引き上げが決定され
ましたね。

【渡辺氏】 遅すぎるとは思いますが、大き
な成果です。これまでも生産者団体側は乳
業メーカーに対して乳価の引き上げを要請
してきましたが、消費サイドの牛乳需要の
低迷を理由に受け入れてもらえませんでした。
たしかに乳価の引き上げは製品の値上げ
に直結し、製品の値上げは消費量（購入
量）の減少に直結するので乳業メーカーの
気持ちもわかります。しかし現在の乳価と
コストのアンバランスは異常ですので、よ
うやく一歩前進といった感じです。なお、
今回の乳価交渉には、生乳関係の各団体が
加盟する（一社）Jミルクが全国の酪農生
産者に実施したアンケート結果が活用され
ました。交渉材料として酪農の実態や生産
現場の状況をデータで示したことが大き
かったと思います。

角田丸森産牛乳のこれから

【則藤】 今後の活動方針についてお聞かせ
いただけますか。

【渡辺氏】 ようやくコロナ禍から抜け出そ
うとしているいま、もう一度原点に立ち帰
りたいと思っています。角田丸森産牛乳の
合言葉である「おいしい牛乳は健康な牛か
ら」のために牛たちがもっと自由に過ごせ
る環境をつくっていきたいですし、牧場で
の交流を再開するために放牧場の柵の整備

なども進めていきたいと思っています。こ
れにはある程度の費用が必要でありいまの
経営状況では簡単なことではありません。
しかし生協メンバーとの充実した交流が産
直の中心にあるということを忘れないよう
にしたいです。

もう一つは、個々の経営の話になりますが、経営改善の取り組みが待ったなしです。乳価の引き上げがあったとはいえ生産者の再生産価格には届いていないのが現状です。乳価の引き上げを待つだけでなく、積極的な経営改善に向けた一手を打っていくことが求められます。例えば乳牛子牛を安定的に確保しながらET（受精卵移植）による和牛子牛の生産に力を入れるのも手ですし、省力的な生産体系を取り入れるのも手だと思います。

【則藤】 角田丸森生産組合の戸数を増やす
ことは可能でしょうか。

【渡辺氏】 これまでも生産組合の仲間を増
やそうと何軒かに声をかけてみたことはあ
りますが、やはり交流の際の生協メンバー
の受け入れとその環境整備が負担になるよ
うですし、フリーストールなどの酪農スタ
イルを変えることも容易ではありません。
幸い、いまの3戸には若い後継者がいます
のでひとまず安心ですが、将来的には生産
基盤のことが課題になるかもしれません。

【則藤】 最後に改めて伺いますが、渡辺さ
んにとって産直の意義とは何でしょうか。

【渡辺氏】 産直を通じた生協メンバーとの
つながりと、それがあつて感ぜられる
心強さだと思います。水害や地震は今後も
発生するでしょうし、酪農経営の状況もど
うなるか見通せません。それでもこの先も

酪農を続けていこうと思えるのは、自分たちの牛乳を飲んでくれる人たちの応援があるからです。彼ら彼女らに美味しい牛乳を届け続けるために、人にとっても牛にとっても地域にとっても良い酪農を考え実践していきたいと思っています。

【則藤】 本日は大変貴重なお話を伺うことができました。本当にありがとうございます。

4. インタビューを終えて

フードシステム論を専門とする筆者にとって生協産直への関心の焦点は、生産者を買値を支える取引の仕組みにあった。今回のインタビューに際しても生産者の乳価に加算される数円の部分の意味や評価について掘り下げようと考えていた。しかし、渡辺博さんのお話で強く印象に残ったのは、生協メンバーとの交流やつながりに関する部分であった。産直は経営面だけでなく生産者の心の支えにもなっていることを実感した。生協メンバーのほうも、生産者の姿を思い浮かべながら感謝して食べ物をいただく。このような食と農の関係は、これからの持続可能なフードシステムを築いていくための基礎になると感じた。

一方で、生協産直の理念の一つである「再生産が可能な価格で買値を支える」ことについてはどう考えればよいだろうか。物価高騰に直面するメンバー（組合員）の生活を支えることと、産直のパートナーである生産者を買値を支えることとの折り合いをいかにつけるか、本当に難しい問題だと思う。定まった答えがないからこそ、現場を見て、生産者の話を聞いて、できれば直接感謝の気持ちを伝えることを続けていくことが大

切であろう。

このたびのインタビューに応じてくださった（有）渡辺ファームの渡辺博さん、インタビューをコーディネートしていただき、みやぎ生協の産直事業について丁寧に説明してくださった産直推進本部事務局長の佐々木ゆかりさんに心より感謝いたします。